vol.150

市長から市民のみなさんへ

市長 白井博文

東北被災地のがれきの搬入について

3月11日の東日本大震災で発生したがれきが相当な量にのぼり，この処理が遅々として進まないことも復旧復興が進まない理由の1つだといわれています。未曾有の大災害を受けた被災地の一日も早い復興は国民みんなの願いです。しかし，震災と同時に発生した福島原発による放射能汚染が，地方からの支援の取り組みを大変複雑にしています。

国は，全国の基礎自治体（市町村）に福島を除く宮城・岩手両県のがれきの受入について，協力を求めてきました。山口県でも説明会が開かれましたし，国からも依頼の文書が届いています。しかし，放射能汚染の広がりについて，不安を解消するだけの科学的な資料が不十分で，地方都市として何とか協力したい気持ちはあるものの，起こりうるかも知れない住民の健康被害の発生を懸念すると，お断りする以外はありませんでした。10月20日のことです。被災地の人たちのことを考えるとつらい選択でした。

搬入には，廃棄物取扱の許可を受けた民間業者が関わることもあり得ます。法律の上では，そのような場合，搬出元（被災地）の市町村長から搬出先の市町村長（例えば私）に通知することになっていて，私の知らないうちに無断で持ち込まれることはあり得ない仕組みになっています。念のため県に照会したところ，既に山陽小野田市の意向は国を通じて被災各地に届けられているし，県も最大限の協力はするので，心配はご無用とのことでした。

女性の日について

国体や全国障害者スポーツ大会が10月に集中したため，今年の女性の日の記念事業は11月5日に延期して開催しました。当日の会場は山口東京理科大学。数年前に同大学を卒業し，地元の佐賀大学大学院医学研究科を経て，現在，某製薬会社で新薬の開発研究に取り組んでいる女性に，「私のこれまでとこれから」と題して講演をお願いしました。成長の過程で何人かの大切な人と死別し，生命の尊さを身をもって学ぶとともに，出会った人とのご縁に感謝する気持ちを大切にしたいと思ううちに，人の命に関わる医学や薬学の分野で働きたいと考えるようになったとのこと。勤務先は長期で有給の育児休暇が保障されているなど，職業と家庭の両立への配慮も厚いそうです。

「職場の男性はとかく夢見がちですが，私が抑えている」とか。新薬の開発に取り組む研究チームでの話のようですが，どの分野であれ，男性社会に女性も参加することによる顔ぶれの多様性が，視野を拡げ一段と活性化するという男女共同参画の企図するものが実践されているように思いました。

対話の日

11月24日㈭ 19:00～
石井手自治会館

12月22日㈭ 19:00～
青年の家